

ノノ中重ナルモノヲ舉グレバ左ノ如シ

依囑製作一覽

品目	數量	受託年度	竣工年度	依頼者
奉迎表容器	壹箱	昭和十年四月三日	昭和十年四月八日	東京市長 牛塚 虎太郎
花盛器	壹個	同年四月十五日	同年四月二十三日	農林大臣 官房會計課
白銅鑄造硯屏	四百貳拾六個	同年五月十五日	同年七月十一日	東京市長 牛塚 虎太郎
賞牌	八個	同年七月十日	同年九月十三日	日本學術協會理事 西 成 甫
花盛器	貳個	同年十月一日	同年十一月二日	農林大臣 官房會計課
畫帖	壹帖	同年十月七日	昭和十一年三月三十一日	日本銀行秘書役 岡野 清 豪
東郷元帥室入口棹及扉原型	壹式	同年同月同日	同年三月三十一日	海軍兵學校 海軍中將及川古志郎
メタル	壹個	同年十二月十三日	同年三月三十日	昭和第一商業學校長 寶 積 一
花盛器	貳個	昭和十一年二月三日	同年三月九日	農林大臣 官房會計課
東郷元帥遺容器及臺石	壹式	同年三月二日	同年三月二十一日	海軍兵學校 海軍中將出光万兵衛

『校友会会報』記事抜粹

學校記事〔五〕<sup>号</sup> S・一〇・六・二五<sup>日</sup>

職員辭令

昭和十年二月八日

生徒主事兼教授 佐々木 卓

紋勲六等授瑞寶章（賞勳局）

同 三月七日

依願解雇（本校）

同 同月二十二日

各通

助教授 松田 義之  
講師 鈴川 信一

教員檢定委員會臨時委員被仰付（内閣）

同 四月一日

陸絛高等官三等（内閣）

教授 南 薰造

同 同月四日

教授 岡田三郎助

各通

同 六角注多良  
同 津田 信夫  
同 和田 三造  
同 海野 清

工藝審査委員會委員被仰付（内閣）

同 同月十二日

教授兼生徒主事 森田龜之助

工藝科豫科主任ヲ命ス（本校）

同 同月同日

教授 和田 三造

工藝科豫科主任ヲ免ス（本校）

同 同月二十一日

休職教授 渡邊 啓三

右昭和八年四月二十二日休職ノ處本日ヲ以テ休職期間滿了セリ

同 同月二十四日

平野 茂

任東京美術學校教授 紋高等官七等(内閣)

助教 青山 新

本校講師ヲ囑託ス 但シ工藝科漆工部ニ課スル工藝化學授業擔任ノ

同 同月十七日

同 同月十七日

コト(本校)

同 同月十五日

外務省事務ヲ臨時囑託ス(外務省)

教授 矢代 幸雄

叙從五位(宮内省)

教授 南 薫造

同 同月十七日

助教 廣川松五郎

昭和十年四月三十日

平塚 運一

任東京美術學校教授 紋高等官七等(内閣)

同 同月同日

臨時版畫研究室木版部指導ヲ囑託ス(本校)

同 同月同日

講師 澤口 悟一

同 同月同日

教授 田邊 至

昭和十年商工省輸出工藝展覽會審査委員ヲ命ス(商工省)

同 同月同日

臨時版畫研究室主任ヲ命ス 臨時版畫研究室エツチング部指導ヲ命

同 同月同日

教授 津田 信夫

ス(本校)

同 同月同日

同 和田 三造

助教授 松田 義之

助教授 山崎覺太郎

臨時版畫エツチング部指導ヲ命ス(本校)

昭和十年商工省輸出工藝展覽會審査(委)員ヲ囑託ス(商工省)

同 五月七日

宮地 常助

新入生氏名(いろは順) [出身校省略]

本校圖書師範科生徒ニ對シ園藝ニ關スル課外講議ヲ臨時囑託ス

日本畫科豫科

(本校)

同 同月十日

教授 矢代 幸雄

石崎 明

杜田 清史

戸田 三顯

歐米各國へ出張ヲ命ス(文部省)

太田 正弘

大竹保之助

小澤 道治

同 同月十三日

勝本 三郎

金子 孝信

高村 正之

成澤喜三郎

村田 巳谷

村田 信一

福田 鑒治

小林 記春

水田 康雄

鹽月庄三郎  
須藤 良清

清水 正道  
杉山 吉茂

森 茂

石本 光輝  
西村 利作  
森野 良介

濱中 光壽  
田村 巖

西村 敏幸  
晝間 弘

油畫科豫科

石田 順治

伊勢 正三

本城 正

工藝科圖案部豫科

富田 重幸

大柳 龍男

大澤 正夫

今泉 六郎

大崎 定家

加藤泰治郎

乙葉 統

小野田弘彌

金子 德衛

龜井 透

田中 豊男

瀧口 二郎

高田 修

田中 芳郎

竹澤 基

古田 順吉

藤本 能道

小山 清男

中村 全

中村 泉

白田輝四郎

小林重太郎

駒井 達郎

坂本 貞雄

野崎 英男

樽松 正利

串田 良方

工藝科彫金部豫科

松風 榮一

清水 國祐

樋口益次郎

柳 宗理

山尾 平

山口 正美

工藝科彫金部豫科

松本 博臣

寺島祥五郎

淺野 利朗

矢島 貞男

丸茂 文孝

松岡 俊彦

森 涓三

鈴木 幸平

徐 文 熙

松田藤兵衛

益田 卯咲

益永 端

工藝科鍛金部豫科

石川 義夫

細溝 芳夫

天野 敏臣

藤本東一良

郡山 正

興梶 武

工藝科鑄金部豫科

原田 昌平

特別學生

栗田 晃夫

坂井 正義

坂根 福壽

宮河 久

施 丙 火

清水喜代志

特別學生

本居 宣文

元田 乾行

森井 龍起

牧野 剛

特別學生

杉浦 正一

關川 一郎

特別學生

趙 琦

工藝科鑄金部豫科

戶谷純之助

特別學生

沈 壽 澄

彫刻科塑造部豫科

稻田光太郎

石川 正夫

伊勢 典賢

工藝科鑄金部豫科

原田 昌平

特別學生

栗田 晃夫

井手 宣通

永井龜三郎

樂 喜慶

工藝科鑄金部豫科

牧野 剛

特別學生

杉浦 正一

向井 良吉

禹 東 和

植木 力

工藝科漆工部豫科

飯塚 幹雄

特別學生

沈 壽 澄

梅田 修

國光 與

山本 惇一

工藝科漆工部豫科

飯塚 幹雄

特別學生

德村 正治

佛子 泰夫

澤村 吉光

三宅 常夫

工藝科漆工部豫科

飯塚 幹雄

特別學生

島田 正男

特別學生

趙 冠 洲

林 達 川

工藝科漆工部豫科

大原 敬介

特別學生

久保 儀市

彫刻科木彫部豫科

杉下 繁

建築科豫科

高田 秀三 村上 榮 山崎 元士  
 牧野 清 佐倉 大有 水野 茂松  
 森田 昕五

圖畫師範科一年

原田 浩 原田 博介 伴 道雄  
 若林喜久平 渡邊 徹也 金子仁三郎  
 鹿島 則元 田中 傳吉 野中 京吉  
 窪田 嘉作 楠見 貞男 南川與四雄  
 宮川 邦雄 清水 一郎 鈴木 亮平

第四十四回卒業證書授與式次第

(昭和十年三月二十五日午前十時)

- 一、新卒業生入場著席 (第一號鐘 講堂北ロヨリ出入)
- 二、職員、參列舊卒業生著席 (第二號鐘 講堂東ロヨリ出入)
- 三、來賓著席 (第三號鐘 講堂東ロヨリ出入)
- 四、校 歌 (一同起立)
- 五、學校長式辭
- 六、卒業證書授與 (卒業生前後敬禮)
- 七、學校長告辭 (卒業生前後敬禮)
- 八、文部大臣祝辭 (卒業生前後敬禮)
- 九、卒業生總代答辭
- 十、式終了挨拶
- 十一、來賓、職員、舊卒業生、新卒業生順次退場

附

- 一、退場後、來賓、舊卒業生ハ休憩所ニテ休憩ノ事
- 二、退場後、職員、新卒業生ハ直ニ寫眞場へ集合ノ事
- 三、式ノ前後ニ於テ卒業生製作品隨意觀覽

卒業生科別人員

科名	本科	選科	特別學生	計
日本畫科	一八	〇	〇	一八
油畫科	四〇	〇	一	四一
雕刻科	七	七	一	一五
木彫部	九	一	〇	一〇
圖案部	一〇	〇	〇	一〇
彫金部	三	〇	〇	三
鍛金部	三	一	〇	四
鑄金部	五	〇	〇	五
漆工部	八	〇	〇	八
建築科	七	〇	〇	七
圖畫師範科	二〇	〇	〇	二〇
合 計	一三〇	九	二	一四一

昭和十年三月二十五日 東京美術學校

卒業生姓名卒業製作目錄(席次いろは順)

日本畫科

屋上遊園 本科 萩尾 貫一 福岡  
 日本橋展望 同 西村 四郎 東京

石切り場	街	舊き港	野を行く	秋陽	秋日	初冬	田端風景	鐘樓の秋	小春	風景	御茶の水早春	漁村閑日	春近き海	南伊豆風景	夜の舗道	油畫科	裸婦坐像	臥裸婦	裸婦坐像	坐像	ポーズせる裸婦	魚市場	裸婦坐像
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	自畫像	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	本科	同	同	同	同	同	同
小川壽一	岡田昇	河部貞夫	川崎雅	加島一郎	田村基	竹内喜一	南部正一	山口光輝	丸山福太	蒔田英一	小寺禮三	水谷隆	三浦善作	平井徳男	清野覺二	伊藤清永	井上隼雄	井手宣通	長谷川時郎	細田浩	土肥原三千喜	千葉衛	
東京	廣島	島根	香川	東京	群馬	愛知	石川	東京	香川	青森	愛知	三重	山形	岡山	福島	兵庫	山口	熊本	秋田	廣島	東京	宮城	
立像	裸婦	裸體	裸婦	鏡少女坐像	少女坐像	裸婦坐像	窓邊	客間の少女	少女坐像	佛蘭西刺繡	横臥裸婦	裸婦	コスチニーム	坐像	魚釣	裸婦横臥	母	立つ	裸婦	裸體	坐像	ギターを弾く男	裸婦
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
大貝彌太郎	小川原脩	大川武司	小倉猛熊	吉田富美	田尻重太	高橋道雄	高島恒茂	高山世繼	副島秀生	坪内正	辻良雄	綱島廉	上原之節	野村章三	熊野禮夫	具島三男	松平康南	益山英吾	房野徳夫	河野通暢	洗春海	荒川俊一郎	佐藤武雄
福岡	北海道	静岡	鹿児島	福島	岡山	北海道	東京	長野	佐賀	廣島	大阪	東京	東京	高知	福岡	福岡	東京	鹿児島	東京	香川	大分	茨城	大分



キヤバレー試案  
明日の廣告宣傳法一提案

同 島田陽次郎 東京  
同 末田 利一 東京

鵜文様飾館  
電氣時計

同 寺井 直次 石川  
同 佐伯 義雄 宮城

彫金部

小 宮

本科 古代 幸三 大分

トーキースタヂオ  
保育施設

本科 山田 鈺也 東京

六角形花瓶

同 赤松 義弘 香川

川奈に建つホテル

同 福田 良一 栃木

果物盛

同 下 暢 東京

鍛金部

壁面燭架

本科 和田 鴨江 和歌山

演劇に關する建物の一試案

同 小池 鎗三 岐阜

鍛鐵花器

同 芳武 茂介 山形

市街地に建つアパートメントハウス

同 小林 進 東京

棚

同 高田 六藏 東京

競技場に建つ體育會館

同 相原 武 山梨

組合(松竹梅透釣香爐)

選科 井尾 敏雄 東京

結核サナトリウム

同 疋田玄二郎 東京

鑄金部

花 瓶

本科 長谷川八十吉 石川

平常成績品(師範科に於ては卒業製作を行はず)  
日本畫(東臺名勝繪卷)

伊藤 昇 秋田

ブツラケット、灰落

同 鹿取 一男 東京

東照宮、西郷南洲銅像附近

野本 正彦 群馬

玄關の連作、花挿

同 内田 邦夫 新潟

帝室博物館、東京府美術館

小池 房雄 福島

水盤、香爐、花瓶

同 廣瀬英五郎 石川

不忍池、東京美術學校

穴澤 祐春 福島

置物、燭臺(對)

同 進來 昇 大分

上野驛、動物園、鐘樓

宮川富士雄 東京

漆工部

電氣蓄音機

本科 井上 周平 香川

油畫

井口 清 静岡

魚文様飾棚

同 石橋 貞治 福島

習作

石井壬子夫 栃木

松竹梅文小屏風

同 金田 諒三 兵庫

同

濱口 忍翁 岐阜

卓

同 中村 保彦 東京

同

羽生 彦之 鹿児島

レコード・キヤビネット

同 近江 晁 秋田

同

鹿兒島光彦 福岡

サボテンと蝶を配せる喫煙具

同 江波戸一郎 千葉

同

鹿兒島光彦 福岡

同 田村 庄内 福島

同 小野口陸太郎 栃木

同 古城 戸優 福岡

同 藤原 昇一 兵庫

同 足代 義郎 東京

同 佐竹 正吾 熊本

同 白井 正 東京

同 志村 正守 北海道

同 敷島弘美智 大阪

同 鈴木 泰正 大分

同 其他習字及手工(木工、金工、染色、刺繡)の作品

昭和十年度野營演習

昭和十年五月十四日—五月十六日

豫科生徒百三十二人参加し習志野廠舎にて晝夜を通して一同元氣に行ふ。

昭和十年五月八日—五月十日

各科一年、師範科二年生徒百三十六人参加し下志津廠舎にて、廠營演習を行ふ。

下志津飛行學校見學、四街道驛迄強行軍を行ひて一同元氣に歸校す。

新入學生徒ノ茶話會

各科豫科及ビ圖畫師範科第一學年ノ新入學ノ生徒ト關係教官及ビ事

務關係ノ親睦ヲ圖ル目的ヲ以テ四回ニ亘リテ茶話會ヲ開催セリ

第一回茶話會

一、時 日 五月一日(水) 午後四時ヨリ約一時間

一、場 所 俱樂部ノ廣間

一、參會者 日本畫科豫科及ビ圖畫師範科第一學年生徒・關係教官

(山田助教、常岡助教、松田(義)助教、佐々木生徒主事、森田教授、田邊(孝)教授、森重少佐)

教務掛會計掛生徒掛ノ各掛員

第二回茶話會

一、時 日 五月三日(金) 午後四時ヨリ約一時間

一、場 所 生徒集會所

一、參會者 油畫科豫科生徒、關係教官(和田校長、佐々木生徒主事、森田教授、田邊(孝)教授、岡助教(一))及ビ

諸掛ノ掛員

第三回茶話會

一、時 日 五月八日(水) 午後四時ヨリ約一時間

一、場 所 生徒集會所

一、參會者 彫刻科(塑造部、木彫部)豫科及ビ建築科豫科生徒、關係教官(大澤講師、岡田講師、水谷助教、金澤講

師、羽下講師、入谷講師、佐々木生徒主事、森田教授、田邊(孝)教授)及ビ諸掛ノ掛員

第四回茶話會

一、時 日 五月十日(金) 午後四時ヨリ約一時間

一、場 所 生徒集會所



一、參會者 工藝科（圖案部、彫金部、鍛金部、鑄金部、漆工部）

豫科、關係教官（六角教授、清水教授、海野教授、高村教授、野口助教授、松田（權）助教授、山崎助教授、森田助教授、深瀬助教授、內藤助教授、丸山講師、羽野講師、磯矢講師）及ビ諸掛ノ掛員

〔校友会〕  
人事部内職幹旋調（昭和十年三月末期）

總計表

求職人員	求人員(需要人員)	就職人員	求職付人員	就職付人員	求人付人員
四六	四一	三〇	八〇%	六五%	七三%

内譯表一（科部職就職者數）

種目科別	工		藝		部	計					
	日本	油畫	彫刻	圖案			彫金	鍛金	鑄金	漆工	建築
建築	一	六	一	二	一	一	一	一	一	一	八
圖案	二	五	一	四	一	一	一	一	一	一	一三
繪畫	二	三	一	一	一	一	一	一	一	一	五
彫刻模作	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
室内裝飾	一	一	二	一	一	一	一	一	一	一	二
家庭教師	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
其他	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二
計	四一	五二	二六	一	一	一	一	一	一	一	一三〇

内譯表二（職種別成績）

職種目	求人員(需要人員)	就職人員	比率	備考
挿繪	一〇	八	八〇%	

圖案	一九	一三	六八
繪畫	七	五	七一
彫刻模作	一	一	一〇〇
室内裝飾	二	一〇〇	一〇〇
家庭教師	一	一	一〇〇
其他	三	二	六六
計	四一	三〇	七三

學校記事（六。S・一〇・十二・一三）

職員辭令

任美術研究所員兼東京美術學校教授	敘高等官三等	六月一日	教授	矢代 幸雄
内閣			教授	和田 三造
陸敘高等官三等	六月一日	内閣	教授	和田 英作
美術研究所長事務取扱 <small>〔マ〕</small> ヲ命ス	六月一日	文部省	教授	青山 新
帝國美術院主事務取扱ヲ囑託ス	六月一日	文部省	教授	岡田三郎助
			教授	和田 英作
			教授	川合芳三郎
			同	藤島 武二

同 結城 貞松

同 北村 西望

同 建畠彌一郎

同 香取秀治郎

同 南 薰造

同 松岡 輝夫

同 朝倉 文夫

同 清水 龜藏

同 廣川松五郎

同 青山 新

同 小泉 勝爾

同 和田 英作

同 森重 幡雄

同 小泉 勝爾

同 津田 信夫

同 森井 健介

同 森重 幡雄

同 小泉 勝爾

同 津田 信夫

同 森井 健介

同 森重 幡雄

同 小泉 勝爾

同 津田 信夫

同 森井 健介

同 森重 幡雄

同 小泉 勝爾

同 津田 信夫

同 森井 健介

依願免本官 八月三十一日 内閣

教授 青山 新

助教授 松田 義之

講師 鈴木 信一

教員檢定委員會臨時委員被免 八月三十一日 内閣

從六位勳五等 森重 幡雄

敍正六位 九月二日 宮内省

關野 克

本校講師ヲ囑託ス

但東洋建築史授業擔任トス 九月二十一日 本校

敍從七位 六月一日 宮内省

敍授 廣川松五郎

敍授 青山 新

敍授 小泉 勝爾

敍授 和田 英作

敍授 森重 幡雄

敍授 小泉 勝爾

敍授 津田 信夫

敍授 森井 健介

敍授 森重 幡雄

敍授 小泉 勝爾

敍授 津田 信夫

敍授 森井 健介

敍授 森重 幡雄

敍授 小泉 勝爾

敍授 津田 信夫

敍授 森井 健介



昭和10年11月4日 大運動会余興スナップ  
工芸科有志は「八木節」で一等賞獲得  
(小森五郎氏提供)

昭和十年度文部省視學委員ヲ命ス 九月十六日 文部省 教授 多賀谷健吉

依願免本官 九月三十日 内閣 教授 松岡 輝夫

敍正五位 十月七日 宮内省 從五位勳五等 松岡 輝夫

帝國美術院明治大正美術史編纂委員會委員ヲ囑託ス 十月十九日 和田 英作

文部省 帝國美術院明治大正美術史編纂委員會幹事ヲ命ス 同月同日

文部省 文部時報資料委員ヲ囑託ス 十月二十八日 文部省 教授 多賀谷健吉

工藝化學室兼務ヲ命ス 十月三十日 本校 講師 磯矢 陽

助手ヲ解キ東京美術學校雇ヲ命ス 學科準備室勤務ヲ命ス 文庫課 助手 加藤 金美

標本掛兼務ヲ命ス 十月三十日 本校 事務囑託 中根 勝

依願解囑 淺野 光子

東京美術學校雇ヲ命ス 經理課庶務掛ヲ命ス 十月三十一日 本校 教授 朝倉 文夫

同 北村 西望

敍從四位 十一月二日 宮内省

敍勳三等授瑞寶章 十一月二日 賞勳局 教授 川合芳三郎

敍勳六等授瑞寶章 十一月二日 賞勳局 同 北村 西望

關野講師 本校講師工學博士從三位勳三等關野貞先生には本年七月十日頃より急性骨髓性白血病に罹らせられ爾來瀧野川區西ヶ原町の自邸に於て只管療養に努められて居ましたが遂に七月二十九日午後九時二十分薨去せられました 誠に痛惜に堪えません 謹んで哀悼の意を表します

宮本〔純一〕書記 豊島區池袋二ノ一、二五〇へ轉居

大江〔雄五〕囑託 本郷區湯島三組町七七へ轉居

増井〔兼吉〕囑託 王子區上十條町一、一二三へ轉居

澤村〔敦子〕雇 中野區天神町三八へ轉居

裏辻〔憲道〕雇 本郷區神明町三〇七桑田要方へ轉居

下村〔英時〕囑託 横濱市中區本牧和田六〇へ轉居

水谷〔武彦〕助教 杉並區和泉町三二六へ轉居

瀨谷〔義広〕書記 横澤市神奈川大寺町四〇七へ轉居

加藤〔金美〕雇 日本橋區橋町四番地ノ四へ轉居

鳩ヶ谷〔敏治〕雇 豊島區西巢鴨二ノ二四三二本橋方へ轉居

山田〔廉〕助教 埼玉縣浦和市常盤町一四三五へ轉居

鈴木〔信一〕講師 芝區白金臺町一ノ六二へ轉居

武田〔寿〕雇 足立區千住綠町九へ轉居

## 正木記念館の設立と開館式

前本校校長正木直彦先生を永久に記念する爲、豫てより本校内陳列館東側松林中に正木記念館建設中の處、先般竣工し去る十一月一日午後一時より、盛大なる開館式が舉行せられた。

正木前校長は明治三十五年御任官以來昭和七年御退官に至る迄、實に三十有二年間本校の校長として我が國美術教育に盡瘁せられ、其の教へを受けたる卒業生、凡そ四千人に及び現に我が國美術界に活躍中の人々の大部分は、先生の教へを受けたる人で有る事は、我等の大いに意を強ふする所である。

然も先生は明治四十年文部省美術展覽會創設に參劃せられ、其の後身が帝國美術院と成るに至つて遂に其の院長となられ、之亦二十有九年の久しきに互つて我國美術の發展奨勵に勉められ我國の美術が今日の如く隆盛に赴いたのには、あづかつて先生の力に俟つもの多しと謂はねばならない。

先生は更に内外博覽會、各種美術展覽會、各種美術團體等の審査官、會長顧問等の重要な美術上の施設に關係せられ、凡て美術に關する事は、悉く先生の御盡力を經たものである事を考ふる時には、如何に先生が美術を通じて國家に貢獻せられたるかを知る事が出来るのである。従つて永年の其功勞に對して皇室から勳一等を親授せられて居らるゝのである。先生は又我が國の美術を外國に紹介して、我皇國文化の宣揚に努められたばかりで無く、外國の美術工藝を我國に紹介する事に就ても卒先御盡瘁あつた爲に、伊太利皇帝、佛蘭西大統領、白耳義皇帝から高位の勳章を受けてゐらるゝのも偶然ではないのである。

先生は學古今に通じ、識東西に及んで居らるゝので有りますが、殊に美術上の事に關しては、考古學的の遺品の御研究から書畫、彫刻及び各種の工藝に互つて、頗る御觀賞が高く、又我國個有の茶道に就いても御造詣が深く、先生の美術工藝に關する御鑑識は夙に斯界の人人の推服して居る處である。

斯の如き次第であるから、正木記念館の建設が昭和七年、先生御退官直後に發表せらるゝや、先生の教へを受けたると受けざるにかゝわらず、又美術界の人と否とにかゝはらず、我が國內各府縣は勿論朝鮮、臺灣、滿洲、支那、シヤム、遠く歐米各國からも續々申込があつて、昭和八年三月末日の締切迄に川合玉堂氏外千百數十名の方々から三萬數千圓の寄附があつたのである。

然のみならず正木先生が二十五年の久しきに互つて會長をしてられた、社團法人國華俱樂部と云ふ美術家及び美術愛好者の團體があつたが、此が解散して其の財産の中から約三萬二千圓餘の寄附があつた爲に、寄附金總額六萬七千圓に及んだのである。

正木記念館建設會實行委員長たる和田本校々長は、正木先生の爲に造る記念館であるから、同先生の御意見を尊重すると云ふ御考へから、正木先生の御意思に副つて純書院造りの日本室を内部に持つた耐震耐火の鐵筋コンクリート造り、延坪約百四十三坪の會館を建設し、その日本室には豫て澁澤子爵家から寄贈せられた、元本校教授橋本雅邦先生の筆になる襖を入れ、欄間には國華俱樂部から寄贈せられた、元本校教授高村光雲先生の透彫の欄間を入れる事とし、本校建築科の金澤講師に其の設計を依頼し、實行委員會に於て、度々協議の結果約一ヶ年の後本年八月竣工し、爾來内部の設備を整頓し

遂に十一月一日を以て開館の運びになつたのである。

尙同館内に安置せらるべき正木先生の壽像は、建設會で造る豫定であつたのであるが、元本校教授沼田一雅氏が正木先生の奨めによつて、先年佛國セーブルに二回も遊學して、陶製施釉の彫刻を研究し、今やセーブルに優るとも劣らない作品を得るに至つたので、その記念として先生の壽像を製作して先生に贈呈したいと云ふ事から、正木先生が更に此を記念館に寄附せらるゝ事となつたのである。

壽像は既に原型を終つて、目下京都國立陶磁器試験所に於て燒成中であるから、不日出來の上は、記念館と陳列館とを連鎖する中庭の堂の中に安置せらるゝ筈であるが、椅子にかけられた先生の等身大の陶像であるから、我國に於ける最大の陶像として、出來の上は定めて斯界の注意を引く事であらうと思ふ。

開館式當日は秋空一碧、片雲無く稀に見る菊日和であつた。定刻以前より參集せられた來賓は松田文部大臣閣下を始め約四百名、運動場に設けられたる天幕内は滿員の盛況であつた。

午後零時三十分瀬川五條天神官に依つて修祓式が舉行せられ、實行委員香取教授司會の下に開館式が擧げられた。先づ實行委員津田教授の事務報告に次いで實行委員長和田本學校長の莊重なる式辭があつた。學校長は

我が東京美術學校〔分〕が明治中期以來幾多ノ困難ナル時世ニ遭遇シナガラ、順調ナル發達ヲ遂ゲ、其ノ效果ヲ擧ゲ來ツテ、世ノ名聲ト信賴トヲ博シ、今日ノ整ツタ組織設備等ヲ有スルニ至リマシタ事ハ、全ク先生ガ多年校長トシテ、其ノ高邁ナル人格ト識見トヲ以

ツテ統率指導セラレ、辛苦經營セラレマシタ贈物ニ外ナラナイノデアリマシテ、學校ト致シマシテモ、又今日本校ニ職ヲ奉ズル者ト致シマシテモ、其ノ數ヘ難キ御恩ニ對シテハ感謝ノ言葉ヲ存ゼヌ次第ナノデ御座イマス（中略）正木先生アツテ美術ハ今日ノ隆盛ヲ見ルニ至リ、美術アツテ初メテ正木先生ガ存在セラル、ノデアルト云フ風ニモ感セラレマシテ、私共ニハ常ニ先生ト美術トハ切り離シテ考ヘル事ガ出來ナイノデアリマス。實ニ先生コソ今日ノ我國美術ノ育テノ親トモ申スベキ唯一ノ御方デアリマセウ。其ノ御功績ハ美術史上ニ永久ニ特記セラルベキデアル事ヲ確信致スモノデ御座イマス。（後略）

本學校長の熱誠なる式辭は來賓に多大の感動を與へた。學校長より正木記念館の鍵と目錄とを正木先生に贈呈せらるゝや、滿場拍手を以つて此を喝采した。次に正木直彦先生壇上に立たれ慇懃に正木記念館を贈られたるに對し感謝の意を表せられ、改めて之を國家に獻納する爲に、松田文部大臣閣下に手交せらるゝや、滿場に再び喝采が起つた。次で文部大臣閣下壇に立たれて音吐朗々として式辭を朗讀せられた。

（前略）今回我が國美術界ノ有志中心トナリ、廣ク社界一般ノ協賛ヲ以テ、莊重ナル正木記念館ヲ建設シ、之ヲ君ニ贈リテ永ク功業ヲ記念セムトシ、君亦之ヲ國家ニ獻納シテ、以テ斯界ノ將來ニ資セラルハ、意義深キ美舉ト謂フ可ク慶祝ニ堪ヘザル所デアリマス、特ニ本館ハ君ノ意アル所ヲ體シテ、和洋鐵骨ノ建築トナシ、純日本書院ヲ設ケ、輪奐ノ美ハ元ヨリ結構精緻ヲ極メ、就中明治大正藝苑ノ雙璧タル、橋本雅邦畫伯ノ襖畫ニ配スル、高村光雲翁

彫刻ノ欄間ヲ以テセルハ、高尚優雅ニシテ眞ニ此レ日本近代美術ノ精髓ヲ、後世ニ遺スト共ニ、君ガ勲功ヲ千秋ニ傳フル好箇ノ記念ト謂フベキデアリマス。(後略)

次に美術界を代表して、帝國美術院會員横山大觀氏立つて祝辭を朗讀し、司會者香取教授の閉會の辭を以つて閉館式を終了したるが、正木記念館に陳列せられたる書畫、工藝等は、同先生の蒐集に係はるものなるを以て、同先生より蒐集に就ての御説明があり、館前に於て記念撮影をなし、後、館を縦覽した。階上日本室には昨年帝國美術院第四部會員一同より、文部省に贈呈せる台子飾一式を以て、正木先生に獻茶する爲に抹茶席を設け、來賓も之に陪し、午後三時よりは、館前天幕内にて宴會場を開設し、宴酬にして正木先生萬歳を三唱し和氣霽々の裡に薄暮散會した。

因に當日の來賓一同には正木十三松堂先生の蒐藏品の代表的作品五種の繪葉書と正木記念館建設會發行の記念繪端書を贈呈した。

亡き父を語る

關野 克

父が始めて本校に教鞭を執つたのは、工科大学造家學科を卒業した翌年の明治二十九年一月のこと、教授種目は建築裝飾術、其中に建築裝飾史も含まれてゐたようであつた。裝飾史は即ち美術史と異語同意でそれに對する父の興味は父一生の研究の發足となつたのである。尤も用器畫法も併せ教へてゐたが聽て同年二月七日に辭して奈良縣に趨いた。古都での技師の五年間は建築に彫刻に繪畫に飛(鳥)鳥奈良時代の藝術の祕境を隅なく尋ね、建築を中心とする美術史研



貞野 関野 (『校友会報』第6号より轉載)

究の主題の確定された時代で、其以後は主題の展開を見られよう。三十五年東大工科大学の助教授となり爾後内務技師或は文部技師を兼ね、各府縣に出張すること屢々、三十五年には韓國三十九年には清國に差遣され始めて兩國の建築、美術の研究に着手した。四十年再び本校圖樣科(案)に建築學を授業することとなり四十一年工學博士の學位を授けられた。大正七年西遊に際し東洋建築史資料蒐集を本校より囑託され歸國後東洋建築史を講じた。昭和三年本官並に兼官を辭しついで東大名譽教授の名稱を受けた後も依然本校に講義し、其間支那滿洲に出張すること屢々であつた。調査研究に孜々として邊ないとき不幸病を得て本年七月二十九日永眠(眠)したのであつた。享年六十九、本校に教鞭を執ること四十年の永きに互つたのである。

造形美術は理論より實際であり従つて其研究は先づ見ることが第一である。それも極めて優秀な作品に接することである。父は之を實行した。語る前に足を運んで體驗したのである。日本内地は無論のこと朝鮮支那滿洲印度に旅行し、且ネパールに入國を企て、目的を達し得なかつたことすらあつた。父の老年にして尙壯健であつたことは近年熱河蒙古に足跡を印せしめた。出張の爲講義が屢々休講になつたことは學生諸君に御氣毒であつたが、しかしそれだけ講義

の内容は新鮮であつたに相違なかつたらう。

父のよく語つたことは、如何なる事でも根本的に研究を徹底さすことであつた。そうしたならば自然にそれを中心として途が開けて行くと云ふのである。父は奈良の技師時代に古代日本美術の研究を極め得てこそ朝鮮支那等に發展することが容易であつたのであらう。父は漢から唐時代迄の藝術を以つて東洋に於ける最高としてゐた。理想の藝術は人の達し得る最高の水準で其處に様式の大成があると考へた。模倣は既に退歩を意味してゐる。百尺竿頭一步を進めなければならぬ。又父は云ふ、優秀なる美術はその範圍を擴大すればする程價值が高まるものでなければならぬと。日本に於けるよりは東洋、東洋に於けるよりは世界に於ける價值が大でなければならぬ。其處で我國の國寶は東洋を背景としてこそ我國民が其保存の義務を感じるのである。父の文部省にあつて國寶及び重要美術品の保存に努力したのは人のよく知るところである。私は此度父の後を承け教壇に始めて立つことになつた。蓋し感慨無量である。

#### 高村光雲先生銅像除幕式

昨年十月十日他界せられました、元本校教授高村光雲先生の御功業記念の爲建設せられた銅像除幕式は、十一月一日、建設地たる本校玄關前にて行はれました。

先生は東京美術學校開設以來、後進の誘掖指導の爲一進の榮達を顧ず、教授の職に在る事三十餘年、旁ら帝室技藝員並に帝國美術院會員として吾國彫刻界の爲に精進せられたる事は夙に世人の敬仰讚

嘆する次第であります。

今回建設の銅像は嘗つて先生の還曆祝賀會に際して門下生一同より先生へ贈呈せられたる、令嗣光太郎氏の製作に係る壽像を、先生御他界の後、門下生一同によつて再び高村家より請ひ受けて、之を先生の第二のアトリエとせられた美術學校に建設するの案を建て、再び光太郎氏、豊周氏兩令息の改作、鑄造の努力によつて、美事なる銅像が完成した次第であります。

當日は來賓百數十名に及び、午後二時令孫高村規氏の除幕によつて式は開かれ、門下代表本山白雲氏の挨拶、事業報告、校長代理津田〔信夫〕先生祝辭、來賓總代北村西望氏祝辭、高村豊周氏の謝辭、次いで門下代表山崎朝雲氏より學校へ銅像贈呈の式あつて會を夕景閉じました。

#### 関連事項

##### ① 「東京美術學校の現況」

これは昭和十年十一月二十二日、和田英作校長に文部省より『文部時報』掲載原稿の依頼があつた際に作成された文書である。「至白昭和十年文部省往復書類」に和田の草稿とともに綴込んである。

#### 東京美術學校の現況

本校は、我邦唯一の官立美術學校で、明治二十年の創立にかゝり、やがて滿五十年の記念日を迎へんとしてゐる。其間幾多の變遷を經、多數の巨匠を美術界に、有爲の教育家を美術教育界に送つて今日に及んでゐるが、現在では科を日本畫、油畫、彫刻、